ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第193号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成30年9月21日

亜種シマエナガ（幼鳥）

2018. 6.15　札幌市豊平区西岡公園
撮影者　中　村　　隆（札幌市南区）

もくじ

外来鳥類の現状と対策事例
森林総合研究所四国支所　佐藤　重穂 …… 2
北海道の探鳥地（1）　一年を通して野鳥が楽しめる野付半島の魅力
野付半島ネイチャーセンター長　藤井　薫 …… 4
「いしかり調整池」の施設利用に関する取り組み
探鳥幹事代表　早坂　泰夫 …… 7
表紙の鳥（亜種シマエナガ幼鳥）　札幌市南区　中村　隆 …… 8
ロシア極東・鳥紀行（3）　美唄市　藤巻　裕蔵 …… 9
野鳥情報コーナー
メジロガモの長期滞在　伊達市　篠原　盛雄 …… 12
チャバラアカゲラ、天売島にて　札幌市北区　辻　優介 …… 12
苫小牧市でブッポウソウ　胆振管内安平町　小林　誠 …… 13
探鳥会ほうこく …… 13
探鳥会あんない …… 16
鳥民だより …… 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ（http://www.aigokai.org）で閲覧することができます。

外来鳥類の現状と対策事例

森林総合研究所四国支所　佐　藤　重　穂

外来生物とは

外来生物とは、人間の活動によって本来の分布域以外に生息するようになった生物です。外来生物による生態系の撹乱は、生物多様性を保全する上で、きわめて深刻な問題となっています。

外来生物は、生態系にさまざまな影響を及ぼします。IUCN（国際自然保護連合）は、野生生物に絶滅の危機をもたらす三大要因として、人間による直接の利用（捕獲・採取）、生息地の破壊とともに、外来生物による脅威をあげています。

2005年に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」では、生物多様性の保全と人間の活動への悪影響を防ぐために、問題を引き起こす可能性の高い侵略的外来生物を「特定外来生物」として指定することにしています。特定外来生物に指定された種は、飼育・栽培、運搬、輸入などが規制され、防除の対象となります。

外来鳥類の問題点と対策

日本では哺乳類のアライグマや魚類のオオクチバス（ブラックバス）などが各地で大きな問題を引き起こしていますが、鳥類ではどのような問題があるのでしょうか。

鳥類に関する外来種問題というと、1）外国産の鳥類が日本国内に定着して問題になる場合、および2）クマネズミ、マングース、ノネコなどの外来動物（おもに哺乳類）が鳥類を捕食して問題になる場合の二つがあります。どちらも自然環境の保全上の重要な問題ですが、ここでは外国産の鳥類に関する問題について説明します。

2018年現在、特定外来生物に指定されている鳥類はソウシチョウ、ガビチョウ、カオジロガビチョウ、カオグロガビチョウ、ヒゲガビチョウ、シリアカヒヨドリおよびカナダガンの7種です。このうち、シリアカヒヨドリは今のところ日本への侵入は確認されていません。ソウシチョウとガビチョウ類4種はいずれもチメドリ科に属する鳥ですが、日本国内ですでに定着した場所では、高密度に生息するようになって、地域の鳥類相を大きく改変することが知られています。

また、環境省が2015年に公表した「我が国の生態系等に被害を及ぼす恐れのある外来種リスト」（通称；生態系被害防止外来種リスト）では、上記の特定外来種のほかに鳥類では、定着を予防する外来種として外国産メジロ（*Zosterops*属のうち日本産を除くもの）、緊急対策外来種としてインドクジャク、その他の総合対策外来種としてコリンウズラ、コウライキジ、コブハクチョウ、クロエリセイタカシギ、ワカケホンセイインコ、シロガシラが挙げられています。

外来鳥類に関する対策事例

外来生物のこれらの問題を生じさせないために、侵入防止、野生化防止、拡大防止の三原則が重要です。

特定外来種の防除は、環境省の事業としてマングース（沖縄本島、奄美大島）とオオヒキガエル（沖縄県八重山諸島）について実施されているほか、アライグマやアルゼンチンアリをはじめ、多くの自治体等で特定外来種の防除が取り組まれてきました。しかし、鳥類の外来種については防除の取り組みは遅れていました。

そうした状況の中で、外来鳥類の防除が取り組まれている事例を紹介します。

カナダガンは北アメリカ原産の大型のガンで、国内では関東地方や山梨県、静岡県などで野生化個体が確認されていました。しかし、近縁のシジュウカラガン（以前は同種の別亜種とされていたが、現在は別種とされる）との交雑のおそれがあり、また、同様に導入されたヨーロッパでは農業被害を引き起こすことなどが指摘されています。そこで、日本野鳥の会神奈川県支部や博物館などの有志から成るカナダガン調査グループが、防除のための予備調査を進め、それに基づいて2010年から成鳥の捕獲と擬卵への交換による繁殖抑制に取り組み、2015年までに国内の野生化個体をすべて防除することに成功しました。捕獲個体は、動物園等の協力を得て飼育されています。これは特定外来生物については、日本で初めてとなる野外根絶の事例となりました。

特定外来種の鳥類に関する防除のもう一つの事例は四国地域のソウシチョウ防除計画です。これは高知県のNPO法人が立案したもので、2012年に環境省から認定を受けました。ソウシチョウ（写真１）は1980年代から本州と九州で野生化が報告され、おもに山地のブナ林の林床にあるササ群落に高密度で生息します。2000年頃に四国にも定着して、山地の天然林で分布を拡大しつつあります。この防除計画では剣山系と石鎚山系などの自然度の高い地域に捕獲の重点地域を設定し、NPOの会員による防除を進めるというものです。しかし、もっとも効率のよい捕獲方法と思われるかすみ網の使用が環境省から認められなかったため、巣の探索と擬卵への交換による繁殖抑制に取り組んでいるものの、防除が効果的に進んでいません。さらに季節移動や分散過程が未解明で、地域を限定して防除しても、周囲から再侵入の可能性があること、シカによる植生改変の影響を受けてソウシチョウの生息域が周囲に拡散しつつあることなど、様々な課題があり、試行錯誤を繰り返しながら、改善の方法を模索している段階です。今後のNPOの取り組みと環境省の対応に期待するところです。

鳥類の防除計画の特性として、カナダガンのように防除の対象が開けた環境に生息する大型の鳥類の場合は、比較的防除が成功しやすいということがあげられます。一方、森林性の小鳥では防除の課題が山積しています。

北海道の外来鳥類の課題

北海道では今のところ、特定外来生物に指定された鳥類は報告されていませんが、先に紹介した生態系被害防止外来種リストには、北海道にも生息する種として、コウライキジとコブハクチョウ（写真２）があげられています。

コウライキジはキジの生息しない北海道に狩猟鳥として1930年から人為的に導入されたものですが、現在では道南から道央を中心に広く定着しているようです。北海道では捕獲数の減少に伴い1984年から禁猟となっていますが、行政の施策として外来種を保護するのは疑問です。

一方、コブハクチョウは各地の公園等で放し飼いにされて、野外へ逸脱したものがみられます。北海道でも七飯町の大沼公園で生まれた個体に由来する野生化個体がウトナイ湖に生息し、茨城県霞ケ浦へ渡って越冬することが知られています。野生化個体を増やさないために、飼育個体の適正な管理が必要であり、同時に、野生化個体の増殖を抑制することも求められます。

それぞれにどのように取り組んでいくべきか、考える必要があります。

写真1.　ソウシチョウ　高知県

写真2.　コブハクチョウ　茨城県

北海道の探鳥地（1）

一年を通して野鳥が楽しめる　野付半島（のつけ）の魅力

野付半島ネイチャーセンター長　藤　井　　薫

野付半島は、根室管内の標津町と別海町にまたがり、延長26kmにわたる砂嘴（さし）地形で、その規模は日本最大です（図1）。また野付半島は、2005年11月に重要湿地保全に関するラムサール条約に登録され、さらに2014年12月には渡り鳥に関する条約の東アジア・オーストラリア地域フライウエイパートナーシップの「シギ・チドリ類ネットワーク」「ツル類ネットワーク」「ガンカモ類ネットワーク」の３種群がすべての要件を満たしている湿地に承認されており、国際的に非常に重要な野鳥の生息・渡来地となっています。

北海道東部は各種ウミスズメ類が観察できる島々と野鳥観察の聖地とも言える風蓮湖畔・春国岱を含む根室半島やヒグマ・シマフクロウなど原生の趣を残している知床半島など野鳥観察にとっては非常に魅力的な地域です。その北海道東部の中でも鳥との距離が近く、海鳥から小鳥類、水鳥類、猛禽類、と多種多様な野鳥を狭い（道東の感覚では）１カ所で、しかも一年を通して野鳥観察を楽しむことができる魅力溢れる野付半島を紹介します。

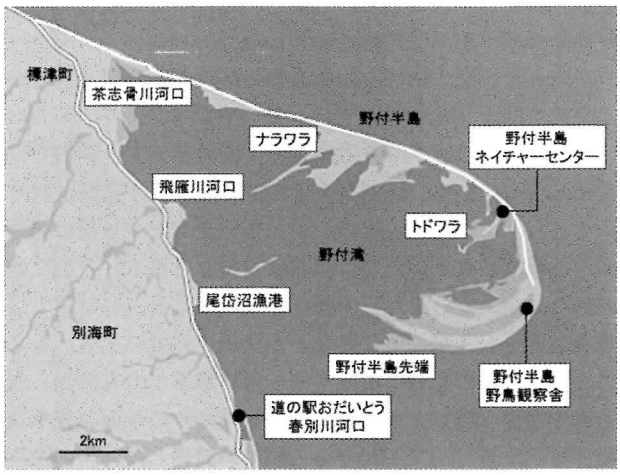

図１．野付半島周辺図

【春季】

野付半島の外海に押し寄せた流氷が去り、野付湾全体を覆っていた氷が緩む４月になると、ヒバリ、ノビタキ、オオジュリンなどの夏鳥の渡来が始まります。

かつて野付半島の原生花園を彩ったシマアオジは1990年代前半には姿を消してしまいましたが、コヨシキリ、オオジシギ、ノゴマなどは、往時と変わらずその姿を楽しむことができます。エゾカンゾウのオレンジ色が一面を染める６月には、夏鳥の渡来の最後を飾るセンニュウ類３種（マキノセンニュウ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ）がやってきますが、その中でマキノセンニュウだけは数が減り、その特徴的な声を聞くのに苦労するようになって来ています。

また、この時期の野付半島は４月下旬から５月上旬に多くのシギチドリ類を間近で観察できる絶好の観察地となっています。種類としては、キョウジョシギ、キアシシギ、メダイチドリ、トウネン、アオアシシギ、ハマシギが多いのですが、特にエリマキシギの夏羽を観察する可能性の高さは日本でも有数の場所となっています。かつては70つがいを超える数が繁殖していたアカアシシギは現在もまだ何とか３～４つがいほどは繁殖をしています。観察できる時期は５月下旬から７月までで、野付先端、野付半島野鳥観察舎（以下、「野鳥観察舎」という）付近の湿地や草地で特徴ある声のディスプレーを見ることができます。

【夏季】

カッコウが目立つ程度の最も鳥の少ない時期ではありますが、７月に入ると、野鳥観察舎の淡水池では、アジサシ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシなどのアジサシ類が観察されるようになります。

そして早くも繁殖を終え夏羽を残したシギチドリの南下が目立つようになります。そのシギチドリの渡りのピークは８月上旬から中旬で数としては1,500羽～2,000羽となっています。

【秋季】

９月の終わりから10月に入ると、原野は一面ススキの穂が目立ち、一気に秋の気配となり、ウミネコを中心としたカモメ類とカモ類の渡来が始まります。

その時期の観察には野鳥観察舎が最適で、カモ類を追ってきたハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウ、ハヤブサ、オオタカなどの猛禽類も観察できます。更に、野鳥観察舎からは至近距離でオオジシギ、タシギなどのジシギ類を観察できます。

そして、10月中旬以降は野付半島の野鳥の象徴となっているコクガンの渡来が本格化します。野付湾には浅い汽水域に国内有数のアマモ場が発達し、それを求めて8,600羽以上（対岸の国後島ケラムイ岬と合わせて）のコクガンが集中します。これは東アジアに渡来するコクガンのほとんどが通過していると考えられています。

このコクガンの観察は、ほとんどが沖の砂州を好む習性の為に、気象条件と潮回りそしてアマモの繁茂状況などの諸条件が上手く重ならないと岸辺には接近ないし上陸する

ことがないので意外に難しいのですが、ナラワラ付近や野付半島ネイチャーセンターから２kmほど標津よりの水域で大群を観察できるチャンスはあります。

また、他のガンカモ類は、オオハクチョウ、ヒシクイが茶志骨川河口から飛雁川河口にかけての水域で数千羽が渡来します。カモ類は、ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモを中心に最大で30,000～50,000羽を数えます。

【冬季】

ユキホオジロが姿を見せるようになると野付の冬の始まりです。その数も数羽から200羽ほどと年による変動が大きいです。

ユキホオジロの観察については、半島先端部のハマニンニクの群落の砂丘が観察ポイントですが、年によっては、ハギマシコ、ツメナガホオジロ、シラガホオジロ、ハマヒバリを見ることもあります。しかしながら、これからも安定してユキホオジロを観察し続ける為に、半島先端部の植生を含めて環境保全し、ユキホオジロとの距離を保つ（50m以上離れて観察）、ハマニンニク群落に入らない、車両の乗り入れ厳禁、長時間の観察をしないなど、充分に配慮した観察をお願いしています。

12月に入ると、雪と氷に閉ざされた世界となり、コミミズクで賑わうこともありますが、全体的には鳥も少なくなり、オオワシの数が目立つようになります。冬季に行われている氷下待網漁などで出る雑魚や廃棄アザラシの数にもよりますが、多い年だと300羽以上のオオワシが集まります（ここ数年は不漁の影響で多くても100羽程度）。また、厳冬期には打ち上げられた海獣類を求めてワタリガラスも姿を見せますが、警戒心が尋常ではないので観察は容易ではありません。どうしても見たい場合は、打ち上げられたアザラシ類から充分に距離を取り（100m以上）車の中からの観察となります。

【野付半島ネイチャーセンターの紹介】

野付半島の自然や歴史についての情報を提供している施設で、2002年5月にオープンしました。１階では観光案内や特産品の販売などのサービスを、２階では自然や歴史の展示、解説などを行なっています。

野鳥観察の情報については、２階の施設で、その時期に見ることができる動植物の情報や写真展などのギャラリーも併設されております。基本的には専門員が常駐しておりますので、お気軽に声をかけて頂ければできる限り野鳥に関する情報を提供する事はできますが、ガイド業務などで不在な場合もありますのでご留意をお願いします。

また、野付半島ネイチャーセンター（以下、「センター」という）のガイドによる野鳥観察ツアーガイドも承っております。一人3,000円で３時間、野付半島内での観察を行います。２～４人程度の少人数のツアーとなりますが、詳細は要相談となっております。

詳しくはセンターのホームページ(http://notsuke.jp)にアクセスしてください。

【野付半島野鳥観察舎】

野鳥観察舎は、センターから半島先端方向に３km先、竜神崎灯台駐車場に車を止め徒歩約５分の場所にあります（写真１）。通称淡水池のほとりにあり、春・秋はオオハクチョウをはじめ多くの渡り鳥が観察できる場所で、根室地方では７番目に作られた観察舎（ハイド）となります。これまでに作られた根室地方の観察舎の良いところを参考に様々な工夫が施された観察舎となっております。まず、内部の構造は、２段ほどステップがあり、平坦な地形の野付半島の中で、広く見渡せる様に高めの視野を確保する作りになっています。また、観察舎内は広く余裕のある作りで根室地方の観察舎の中では最も大きな面積で、最大20名収容可能です。観察舎内部には、季節毎に観察ができる野鳥や動物、植物などの案内、これまでの観察記録、その他の自然や観光案内等を掲示しております。真横は漁師さんの作業道ですので、車は必ず灯台駐車場に止め、歩いて入ってください。どんな野鳥が観察されているかは下記のサイトで情報もチェックしてください。

https://notukehaido.amebaownd.com

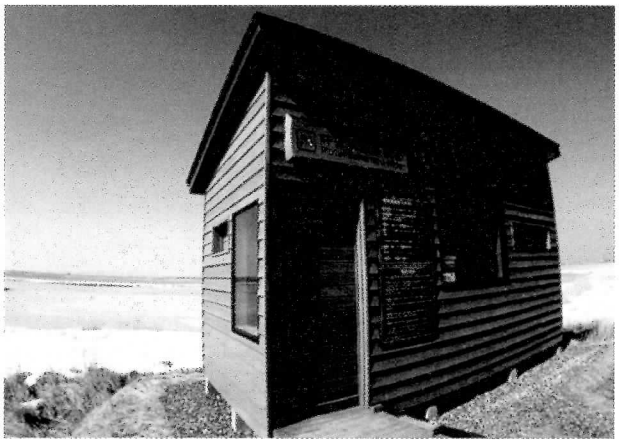

写真１．野付半島野鳥観察舎

（留意事項）

野付半島で野鳥を観察する場合は、以下の点にご留意をお願いします。

- 野付半島内の道路は舗装路も未舗装道路も含め、基本的に漁業者の作業道路となっており、大型車両が頻繁に通りますので駐車も含め交通安全には気をつけてください。
- トイレはセンター駐車場、施設内、竜神崎駐車場、道の駅「おだいとう」にあります。しかし冬季はセンター施設内と道の駅「おだいとう」の２つしか使用できなくなりますのでご注意ください。
- 半島内の食事については、センター１階のレストランが５月～10月いっぱいまで営業しております。
- センターは年間を通じて営業しておりますが、４月～11月は９時から17時、11月～３月は９時から16時となっております。

・竜神崎駐車場より先の未舗装道路は、許可がなければ車両の立ち入りはできません。許可証の発行は、センターのスタッフまで申し出て必要書類に記入し留意事項を守って立ち入ることになります。よろしくお願いいたします。

【2017年を賑わした「野付とその周辺」の鳥たち】

野付半島の野鳥観察の紹介の最後に、2017年を賑わした「野付とその周辺」の鳥たちの数々を紹介いたします。

まず最初に、５月に野鳥観察舎前の淡水池に久しぶりにシマアジ雄１羽が観察されました（写真２）。野付半島では過去に20数羽の群れが観察されたこともありますが、最近はほとんど観察されておりませんでしたので久しぶりの渡来です。その後、雄３羽雌１羽となりもしや繁殖も・・・との期待もありましたが、６月には渡去しました。

写真２．シマアジ　2017.5.21　野鳥観察舎前の淡水池

６月に入ると同じく野鳥観察舎前の淡水池にキョクアジサシ成鳥１羽が飛来しました。これは道内２例目の記録となりました（北海道野鳥だより第189号で紹介済み）。

この直後の６月中旬には、野付半島から北西30ｋｍほどの根北峠の国道沿いの標津町古多糠のビート畑に、アネハヅル成鳥１羽が飛来し、その優美な姿で我々を楽しませてくれました（写真３）。

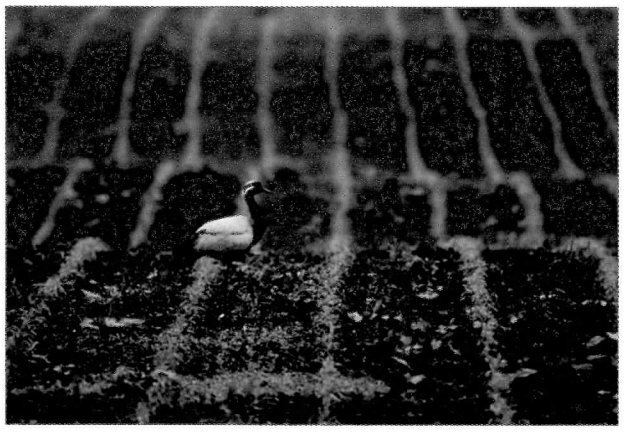

写真３．アネハヅル　2017.6.24　根室管内標津町

さらに、７月に入ると野鳥観察舎前の淡水池に少し夏羽の残るクロハラアジサシ１羽が２週間ほど滞在してくれました（写真４）。あまり知られておりませんが、この淡水池はヌマアジサシ類、特にハジロクロハラアジサシがよく通過して行きますが、クロハラアジサシは野付半島初記録となりました。

写真４．クロハラアジサシ　2017.7.23
野鳥観察舎前の淡水池

８月に入ると、早くも野付半島はシギチドリの秋のシーズンに入り、淡水池の周りのヨシ原にはジシギ類が目立つようになります。野鳥観察舎が出来てからは、識別の厄介なジシギ類をじっくり納得できるまで至近距離で観察することが可能となりその効果か、チュウジシギを記録することができました（写真５）※。

写真５．チュウジシギ　2017.8.13
野鳥観察舎前の淡水池

道東地区は、ジシギ類としては繁殖しているオオジシギ、秋に多いタシギの２種のみで他のジシギは野付では記録がなかったのですが観察舎のハイド効果によって近くで長時間の観察が可能になったことが大きいと思います。ハリオシギについても十分に通過している可能性があるので、今後は注意していきたいと考えています。

10月に入ってすぐ、そろそろ数が増え始めたカモ類を観察しに野鳥観察舎で観察していた時、目の前を尾の両側の白い部分を強調しながらバンの幼鳥が横切りました。野付半島ではオオバンは普通に繁殖しますが、バンは繁殖どころか記録もありません。果たしてこのバンが野付半島で繁

殖したのかどうかはわかりませんが、思わぬ出会いとなりました。そして、2017年を賑わした最後の鳥は、中標津町俵橋のデントコーン畑でタンチョウの群れの中にいたクロヅル１羽でした（写真６）。１ヶ月ほど同じ場所で観察されておりましたが、その後は、タンチョウと一緒に鶴居村の給餌場に移動し、元気に越冬したようです。

このように2017年は様々な鳥との出会いがありましたが、2018年もすでに３月にヤツガシラ、４月にタゲリ、７月にアカアシチョウゲンボウ雌１羽、ハジロクロハラアジサシ夏羽２羽が出現しております。きっとまた、思いもかけないような鳥たちとの出会いが待っていることと思います。是非、今後とも野付半島ネイチャーセンターをよろしくお願いいたします。

※編集部注：ジシギ類の識別は難しく、チュウジシギ以外の種とする見解もあります。

写真６．クロヅル　2017.11.5　根室管内中標津町

「いしかり調整池」の施設利用に関する取り組み

探鳥幹事代表　早　坂　泰　夫

「いしかり調整池」は、石狩川下流域に位置する石狩市北生振地区の巨大な農業用貯水池（約451m×334mの長方形で通常水深3.3m。貯水能力は約500,000㎥）です。８月下旬には農業用水の需要がなくなるため水が抜かれ、数日後には、人工干潟が出現します。９月から10月にかけてサギ類、カモ類、シギ・チドリ類等多くの水鳥がここで羽を休め採餌します。また、その野鳥観察を目当てに数多くのバードウォッチャーが訪れるようになりました。北海道野鳥愛護会（以下、「当会」という）は、2013年からここを定例の探鳥会開催地としています（写真１）。詳細は、探鳥地紹介として「北海道野鳥だより」156号に掲載され、当会のホームページ上でも探鳥地としても紹介されています。

写真１．探鳥会の様子

「いしかり調整池」は、農業用水を供給される農家の方々の出資金と国・自治体等の一部補助金で運営されており、施設内の草刈りも農作業の合間に農家の方々が交代で行うなど農家にとって大切な施設です。毎年９月１日からは、施設を利用するバードウォッチャーのために施設正面入口が開錠され、管理棟施設内トイレ、簡易トイレの使用などの便宜が供与されています。しかしながら、利用者の一部には芝生内に駐車したり、撮影マナーを逸脱したりする人もいて、農家の方々の善意を台無しにするかのような事例も生じました。一方、当会の有志からは、訪れる人のために花壇を整備したり、トイレットペーパー補充のため家庭から持参したりするなど施設開放に少しでも協力しようという活動が行われるようになってきました。少しでも農家の方々の理解を得て、「いしかり調整池」が野鳥観察の場として存続することを願う熱い思いがあったと思います。

こうした取り組みは、個人的レベルではなく会として組織的に行うことの重要性が当会定例幹事会で議論され、「いしかり調整池」の管理団体である石狩土地改良区との協議が2017年９月から開始されました。

数次にわたる協議を重ねた結果、「いしかり調整池」が農業用施設として本来の役割を担うほか、多くの渡り鳥が飛来する中継地として利用されるとともに野鳥観察の場として永続的に利用できるように、当会と石狩土地改良区が相互に協力して環境保全と適切な施設利用を図り、地域社会に貢献することを目的として、「いしかり調整池利用に関わる確認書」を取り交わすことになりました。2018年3

月13日、石狩土地改良区事務所で双方の代表者により確認書が締結されました（別添）。

確認書の中で、当会は次のとおり施設利用にあたって協力することにしました。

(1) 花壇の整備。(2) 管理棟トイレの清掃及びトイレットペーパーの補充。(3) 適正な施設の利用、および利用マナーの啓発活動。(4) 石狩土地改良区の要請に基づく団体・教育機関への野鳥観察活動支援活動。

今年度は、花壇の整備、開放している管理棟トイレの清掃・整備活動、そして、車の駐車等に関わる敷地内でのマナーの向上を啓発する活動など3点の取り組みを重点に実施していくことになりました。さっそく６月15日には会員有志により、用意された約100本の花の苗と会員寄贈のコスモスの苗などを植え、花壇整備しました（写真２）。

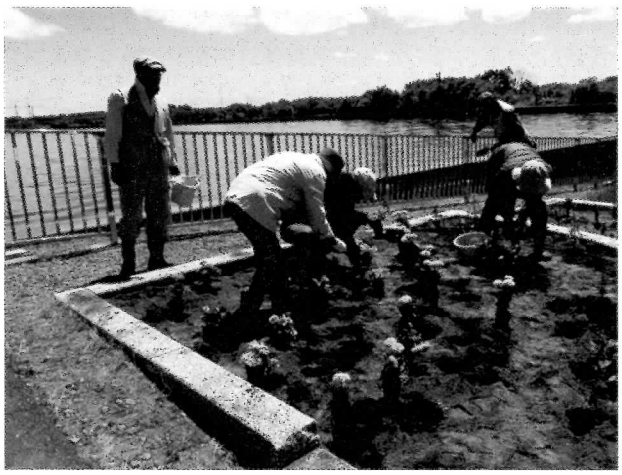

写真２．花壇整備の風景

このような環境整備や施設管理への協力活動は、当会としても初めての試みであり意義あることだと思いますが、今後も石狩土地改良区と協力しながら、継続的に野鳥を観察できる場を維持していく活動を続けていきたいと考えています。今年も野鳥観察マナーを遵守し適切な施設利用を通じて、楽しい野鳥観察ができることを願っています。

いしかり調整池の施設利用に関する確認書

石狩土地改良区（以下、「甲」という）と北海道野鳥愛護会（以下、「乙」という）は、いしかり調整池の施設利用に関して、下記のとおり確認する。

（目的）
第1条　本確認書は、いしかり調整池が本来の目的に加えて、多くの渡り鳥が飛来する中継地として利用されるとともに野鳥観察の場として永続的に利用できるように、甲と乙が相互に協力して環境保全と適正な施設利用を図り、地域社会に貢献することを目的とする。

（いしかり調整池の施設開放）
第2条　甲は、いしかり調整池を下記のとおり施設開放することとする。
(1)　毎年９月、10月の２カ月間、いしかり調整池の施設を野鳥観察のため開放する。
(2)　管理棟トイレを施設利用者のため期間等を限定して開放する。

（施設利用に関する協力）
第3条　乙は、いしかり調整池の施設利用にあたって次のとおり協力するものとする。
(1)　花壇の整備
(2)　管理棟トイレの清掃及びトイレットペーパーの補充
(3)　適正な施設の利用、及び利用マナーの啓発活動
(4)　甲の要請に基づく団体・教育機関への野鳥観察支援活動

（施設利用に関する指導）
第4条　甲は、いしかり調整池の施設利用に関して、必要な限りにおいて乙に対して指導することができる。

（確認書の有効期間）
第5条　この確認書の有効期間は、平成30年４月１日から１年間とする。ただし、有効期間満了日の３か月前までに当事者の一方から書面による別段の意思表示がない場合は、本確認書は自動的に１年間延長されるものとし、以降も同様とする。

（確認書の解除）
第6条　次の場合は、本確認書は解除されるものとする。
(1)　天災その他の事故によりいしかり調整池が使用できなくなったとき。
(2)　甲の申し出により乙に対し解除の通知を行ったとき。
(3)　乙がいしかり調整池での行事を廃止しその旨を甲に通知した場合。

（疑義の決定）
第7条　本確認書において定められた事項につき疑義が生じたとき、または本確認書を変更する必要が生じたときは、その都度甲、乙協議するものとする。

（その他）
第8条　この確認書に定めのない事項については、その都度甲、乙協議するものとする。

以上を確認した証として、本書２通を作成し、双方記名押印の上、各々１通を保有する。

平成30年４月１日

甲　石狩市八幡２丁目332番地11
石狩土地改良区　理事長　伊藤　修二

乙　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル６F
（一般社団法人北海道自然保護協会気付）
北海道野鳥愛護会　会長　樋口　孝城

別添　いしかり調整池の施設利用に関する確認書

表紙の鳥　亜種シマエナガ（幼鳥）

ウォーキングの下見にと出向いた公園の森で見かけた７～８羽の群れの中の１羽です。本種の幼鳥はこれまで野鳥撮影ポイントで有名な千歳市の水場で撮ったことがあるだけなので、自然の森で近撮できて嬉しかったです。亜種シマエナガ成鳥は顔が真白く、亜種エナガとの相違が明瞭ですが、幼鳥には亜種間の相違がみられませんね。

中村　隆（札幌市南区）

ロシア極東・鳥紀行（3）

美唄市　藤　巻　裕　蔵

カムチャツカへ

1991年にはカムチャツカを訪れることができた。日ソ（現在は日ロ）渡り鳥等保護条約に基づく鳥類共同調査のためで、訪れたのはカムチャツカ半島南東部の北緯54～55度に位置するクロノツキー生物圏保護区である（図２）。カムチャツカ半島の南部は外国人立入禁止であったが、この年の１月にこの制限がなくなり、私たちは日本の鳥類研究者として初めてこの保護区に入ることになった。もちろん私にとっても初めてのカムチャツカである。

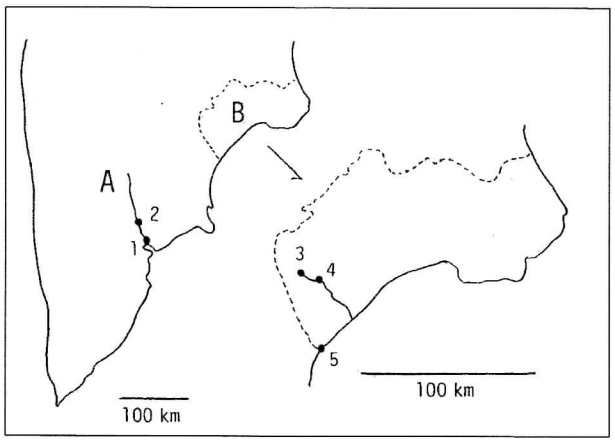

図２．カムチャツカ半島で訪れた場所の位置図.
A=アヴァチャ川、B=クロノツキー生物圏保護区、
1=アヴァチャ川下流部、2=エリゾヴォ、3=ウゾン山カルデラ、
4=ゲイゼル谷、5=セミャチク潟

このときの調査隊は、日本側からは私のほか、山階鳥類研究所、日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟、北海道庁の研究者からなり、条約の関係もあって環境庁職員も加わり、計６人であった。このうち道庁の梅木賢俊さんは本会の会員である。私たちは６月29日新潟からハバロフスクへ、ここで１泊した後、翌日カムチャツカのペトロパヴロフスク・カムチャツキーに到着した。空港ではすぐ目の前にそびえるコリャークスカヤ山など3,000m級の山が私たちを歓迎してくれているように思えた。周辺はすでに緑で覆われ、いろいろな鳥が囀っており、保護区に入る前に訪れたアヴァチャ川河口部の湿原ではユリカモメやアジサシが抱卵中であった。夏の真っ盛りというのに、外の気温は９℃前後、春先に戻ったような寒さであった。しかし、これはまだ序の口で、７月３日の夕方には雨がみぞれになり、翌朝起きたら雪が積もっていた。

クロノツキー生物圏保護区は、東西に約100km、南北に約60kmで、面積は96万ha、大雪山国立公園の４倍以上もある。保護区は研究や管理のため以外は原則として立入禁止なので自動車道路はない。移動手段は徒歩かヘリコプターである。7月12日までの保護区滞在中、ウゾン山カルデラ、ゲイゼル谷、海岸のセミャチク潟の３カ所を訪れた。

ウゾン山カルデラ

ロシア側から国家自然保護委員会の職員2人と保護区の研究者・レンジャーの計4人が加わった共同調査隊は、7月3日にヘリコプターMI-8で最初の目的地ウゾン山のカルデラに向かった。ヘリコプターは大型で、日ロの隊員10人と全ての荷物を載せても、機内にはまだかなりの余裕がある。20人くらいは乗れるのではないか。

エリゾヴォのヘリポートを飛立つと、農耕地を過ぎ、すぐに森林帯である。ほぼ全体がダケカンバのようであるが、標高が高くなると樹木の葉はまだ出ていない。山岳地帯に入ると高木はほとんどなく、まだかなりの残雪が見られた。1時間ほどでカルデラに到着。ここにはログハウス風の調査ステーションがあり（写真10）、私たちはここを基地として調査することになった。

写真10. ウゾン山カルデラの調査ステーション

このカルデラは標高650mで、もう高木林帯の上である。直径約10kmの大きさで、この中にいくつかの湖があり、その周辺は湿原、ツンドラとなっていて、カルデラ斜面はミヤマハンノキやハイマツの低木林である。

カルデラ内のツンドラや斜面には所々かなり残雪があったが、多くの鳥類が抱卵・育雛中であった。ここの自然の大きな特徴は、あちこちから温泉が出ていることである。その周辺は「暖かな野原」で、セキレイ類やメダイ

チドリはこのように地熱のある所に好んで巣を造るそうである。このような所にある巣では、抱卵期間が標準より短かったり、雛が寒さで死亡することがないとのことであった。温泉周辺は鳥たちの繁殖には間違いなく特等地であろう。私たちも温泉の恩恵にあずかった。ステーションのすぐ近くに温泉の池がある。名付けて「風呂の沼」。冷たい雨が降る中、服を脱いで池に入るまでは地獄、入ってしまえば天国である。

オオワシ調査

このときの調査の目的の一つは、オオワシの繁殖状況の調査である。カルデラでの１日目は概況調査、２日目はオオワシ調査である。巣は湖の一つの岸辺に立つダケカンバの上にあった。巣は直径1.5mくらいで、地上６～７mにあった。この巣は８年ほど前からあり、繁殖のたびに巣材を運んできては修繕するので、巣の厚さも1m近くある。巣近くには成鳥2羽がいたので、使用中の巣であることは確実であった。

カルデラ内の大きな湖を源とする川には体長60cmほどの大きな陸封型のイワナがいるので、これをおもな餌にしているようである。このイワナは私たちの食物にもなった。動植物の捕獲・採取が禁止されている保護区内でも、所長の許可があれば魚の場合は食用とする量だけ捕獲できるのである。

カルデラ内の巣のほかでもオオワシの巣を３カ所で調べたが、これらはいずれも餌となる魚が豊富な海岸にあった。一つは海岸の岩の上（後述）、他の二つはダケカンバの上に造られていた。一つの巣の下には食べ残しとおもわれるカラフトマスの頭部が落ちていた。

どの巣も長年使われているようで、樹上の巣は１～1.5mの厚さがあった。かなりの重さだとおもわれるが、ロシアの研究者の話ではときには巣自体の重さで落ちることがあるという。育雛中に巣が落ちては繁殖失敗になるので、落ちそうな巣があると、あらかじめ落としてしまうとのことであった。

ゲイゼル谷

ウゾン山カルデラで６日間の調査をした後、16km離れたゲイゼル谷に移動した。平坦なカルデラ内に比べると、ここは周辺の山々に源をもつ川に刻まれた深い谷である。谷の中程、標高450mの平坦な所に調査ステーションがあり、私たちはここを拠点に調査を進めた。

このあたりでは、ダケカンバ林、ハイマツやミヤマハンノキの低木林、高茎草原がモザイク状になっていて、クロジやカシラダカなどの森林の鳥とアカマシコやシベリアセンニュウなどの潅木・草原の鳥の両方を観察できた。中でもアカマシコの雄は頭から胸にかけて赤く、美しい声で囀り、印象的であった。ロシアの研究者によると、アカマシコの囀りの聞きなしは「chavychu videl（マスノスケを見たか）」である。ちょうどこの時期にマスノスケ（chavycha）が遡上してくるのである。

この谷にはいたるところ温泉が出ている。その大部分は間欠泉で、数分おきに熱水と噴気を出している（写真11）。噴気の出る間隔、高さは様々であるが、大きなものでは噴気が高さ70m位まで上がり、同時に熱水が滝のように流れ出、なかなか見事である。

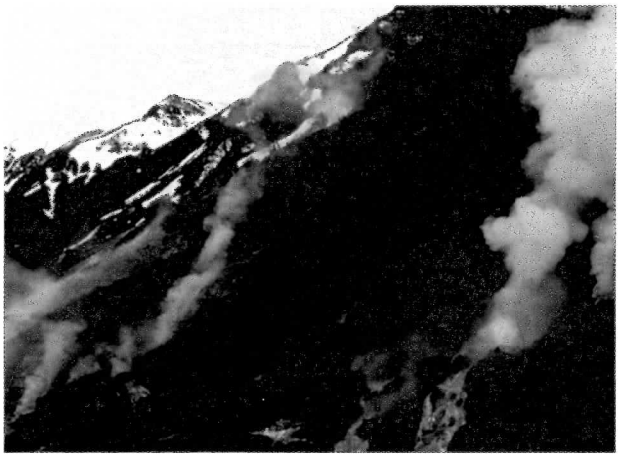

写真11. ゲイゼル谷の間欠泉

このような間欠泉がステーションの上流３km、下流３kmにわたってある。「ゲイゼル」とはドイツ語で間欠泉を意味するが、それがそのまま地名になっているわけである。まさに名前のとおりの間欠泉の谷である。

保護区のほぼ全域が野生動物の好適な生息環境となっているが、生息不適地もある。谷の上流部の山岳ツンドラで一部浅い盆地状になった所では、地上50cmくらいまで有毒ガスが滞留しているため、地上営巣性の鳥類は生息できない。「死の谷」といわれ、ここで調査しているとき、しゃがんでは駄目だと言われた。

アネクドート（小噺）

ゲイゼル谷で調査しているとき、案内役の保護区の研究者が曰く、盛んに大きな噴気を出す間欠泉を指して「これは資本主義の間欠泉」、たまに小さな噴気を上げる方を「こちらは社会主義の間欠泉」。これはロシア人お得意のアネクドート（小噺）である。アネクドートとは滑稽な小噺で、ロシア人には人気があり、街角のキオスクではアネクドート専門の雑誌も販売されているほどである。落ちのある落語の小噺に似ており、直接政治批判のできなかったソ連時代には、このような小噺で社会に対する不満を発散していたのであろう。

このほか、普段の会話の中でもユーモアのある表現がよく出てくる。一度迎えのヘリコプターが予定の時刻よりかなり遅れたとき、日本側のある隊員が「ヘリコプターは何時来るのか？」と問いただしたところ、答えは「『予定』は『未定』である」であった。これで、ヘリを待ついらいら気分は消滅してしまった。

ヒグマ

保護区内では、いたる処ヒグマの新しい糞や足跡が見られた。このほかオオカミの足跡も見られた。調査初日、ステーションに着いて荷物を整理しているとき、早速ヒグマが見られた。300mほど離れた雪渓を１頭のヒグマがゆっくり歩いてくる。しばらくしてから、私たちの声が聞こえたのか、立止まってこちらをじっと見つめていたが、やがて走ってハイマツの繁みに逃げ込んだ。翌日雪渓に残された足跡を調べたが、ロシアの研究者によると体重600kg前後はあり、最大級のクマとのことである。

ゲイゼル谷では、まわりの斜面で毎日ヒグマが採餌しており、多いときで同時に５頭も見られた。ある日写真撮影のためか1頭のヒグマにゆっくりと近づく人がいた。クマの肩高が人の背丈ほどもある。このような大型の個体が少なくないようである。保護区では捕獲禁止なので、かなり大きくなるまで生き続けるためであるという。

その他にも数回ヒグマを見る機会があった。そのうち２回はこちらから近づいてみたが、一度はこちらを気にせずに草を食べ続けており、一度はクマの方が走って逃げてしまった。

ヒグマに出会ったときの対策を聞いたところ、麻酔銃で眠らせてその間に遠ざかるか、発煙筒をたくということであった。しかし、幸いなことにカムチャツカではヒグマによる人身事故はなかったという。

セミャチク潟

７月10日に３番目の調査地セミャチク潟に移動した。この湖は海岸にある潟湖で、これまでの山の中の環境とは大きく異なり、湖の周りは湿原とそれに続く高茎草原やダケカンバ林である（写真12）。湖は海岸沿いに７kmほどあり、濤沸湖位の大きさであろうか。

写真12. セミャチク潟

ここでは管理用の小さな小屋があるだけである。これは宿泊向きではないので、カムチャツカに来てから初めてのテント生活となった。調査ステーションと違い、炊事もペチカではなく、焚火である。テントの設営、薪集め、薪割、焚火と調査以外にもやることが少なくない。

ここでの主な調査対象は、やはりオオワシである。オオワシは海岸から海上に突き出た高さ15mほどの岩の上にあった（写真13）。

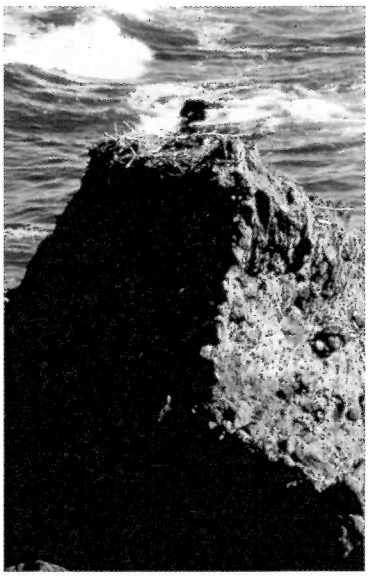

写真13. 岩上の巣と幼鳥

樹上の巣と違い、巣の中もよく見えたが、かなり大きくなった幼鳥１羽がおり、近くの樹上にはそれを見守るように成鳥１羽がいた。もう１巣はキャンプから約500mのダケカンバ上にあった。すぐ近くでカササギが繁殖していたが、オオワシが繁殖する年だけだという。多分オオワシを天敵除けに利用しているのであろう。

写真14. クサシギの巣と卵

湿原ではシギ類、ユリカモメ、アジサシ類、カモ類などが繁殖していたが（写真14）、この年には６月に長雨で多くの巣が水没し、調査したときにはやり直しの繁殖中で、巣はあまり多くないとのことであった。このほか潅木・草原ではシベリアセンニュウ、マキノセンニュウ、ツメナガセキレイ、アカマシコ、シマアオジなど、森林ではコガラ、オオムシクイ、アトリ、ウソ、カシラダカなど、海上ではシノリガモ、ヒメウ、ウミバト、セグロカモメ、カモメなどが見られた。

いずれの調査地でも、秋から冬にかけて日本に渡来するこれらの鳥類が、夏の間どのような環境で生活しているのかを観察することができたのは大きな収穫であった。また、雄大な景色、ヒグマの多さ、オオワシや大イワナはカムチャツカの自然の豊かさを実感させてくれた。

（つづく）

野鳥 情報コーナー

メジロガモの長期滞在

伊達市　篠原　盛雄

2009年５月から６月にかけて伊達市長流川河口で道内初記録として野鳥だより（第157号）にも投稿しましたが、2018年３月25日胆振管内洞爺湖町板谷川でメジロガモ成鳥雄に再び出会いました。

板谷川は、2000年３月の有珠山噴火前には国道230号沿いに有珠山から海へ流れる小川でしたが、上流部が2000年噴火の際火口がいくつも開き、たくさんの火山灰が堆積しました。そのため川下の泥流被害を防ぐため、砂防ダム、流路工の工事が２年後までには完成していました。その後、板谷川の砂防ダム（大きいもの70m×50mが２つ）にたまった土砂にアシが生え、ダムの半分が水深１mほどの池になり、そこにカモ類が越冬する場所となりました。

コガモなど50羽ほどが観察され、時々覗いていました。３月25日に見に行くと、それまで４羽しかいなかったキンクロハジロが９羽に倍加していましたので、よく観察してみるとその中にメジロガモの成鳥雄が紛れていました。北海道では非常に珍しいと思い、旅立つまで毎日観察に出かけました。警戒心が強くすぐ遠ざかってアシの陰に隠れてしまいますが、時々潜水して何か食べていました。すぐ旅立っていくものと思っていましたが、居心地がよかったのか終認は４月29日でした。５月１日に長流川でツクシガモ成鳥雄が飛来してその記録写真を撮っていたため、５月２日板谷川にメジロガモを確認に行きましたがいませんでした。その後も念のため数回行ってみましたが４月29日以降観察できませんでした。メジロガモの繁殖地、越冬地とも日本は外れていましたので以前は非常に珍しい鳥でした。関東以西ではここ数年毎年観察されるようになりましたが、北海道ではまだ珍しい鳥です。

メジロガモ　2018.4.9　胆振管内洞爺湖町板谷川

チャバラアカゲラ、天売島にて

札幌市北区　辻　優介

2018年５月４日天売島で、私は幸運にもチャバラアカゲラの雄を観察することができました。北海道では1993年の渡島大島での記録がありますが、天売島では初の珍しい観測例だと考えられます。このような形でこの記録を残せることを嬉しく思います。

その日、私はサークル活動で天売島に訪れていました。今回の活動の目的は天売島に宿泊しての鳥見でした。期間は５月３日～５月５日の朝まで、日中は部員各自で自由に散策することになっており、ゆったりと島に滞在しつつ、島にいる普段は見られない鳥を見ようという名目でした。

２日目の朝早く、コマドリを探して他の部員１人と私で一緒に森を散策していた時でした。「キツツキのドラミング音がする」ともう一人の部員が僕に呼びかけ、さらにその後アカゲラらしき鳥がいると教えてくれました。彼の指さすキツツキの姿を見た私は目を疑いました。黄色い嘴、背中の密な白斑、下尾筒と頭の鮮やかな赤、そのお腹から顔に至るまで覆う橙色。アカゲラでもコアカゲラでもオオアカゲラでもない、あれはなんだと図鑑をめくり、観察を続けつつ、２人であれでもないこれでもないとしばらく考えていました。が、同定は確信に至らず、他の参加者にも知らせて意見を聞いてみることになりました。その連絡を受けた彼らは大いに驚き、「それはチャバラアカゲラだ」と教えてくれました。私たち２人がその鳥を観察していた時間は５分にも満たない程度でしたが、もっと長く、濃い時間に感じました。

何が起こるか分からない、島での鳥見の魅力が存分に味わえた体験でした。来年にはどんな鳥が天売島に飛来するのでしょうか。今から楽しみでなりません。

チャバラアカゲラ　2018.5.4　天売島

苫小牧市でブッポウソウ

胆振管内安平町　小林　誠

2018年５月27日午前、苫小牧市勇払でブッポウソウ２羽に遭遇したので報告します。

この日は、普段どおり妻とともに野生動物の探索に出かけていました。辺りは木々が立ち込める林野部。野生動物の気配を感じ取ろうと五感を使って道を進んでいました。ツツドリや小鳥の鳴き声が終始聞こえていた中、「ゲッゲッ」とカエルのような鳴き声が聞こえて来ました。「ここでカエルの声？聞きなれない声だね」と妻に投げかけ、２人で頭を悩ませていました。偶然にも野鳥撮影をする仲間に出会い「変な声がするんですよ」なんてことを話している時、予期せぬ出会いに恵まれました。

木々の間から１羽の野鳥が飛び立ち、最初は遠いため「カラスかな？」と仲間の１人が口にした。「いや・・・ブッポウソウだ」コバルトブルーの羽色ですぐに分かりましたが、その事態を飲み込めず反芻しました。

「ブッポウソウ！ブッポウソウ、ブッポウソウ！」思わぬ出会いに驚き３度も名前を連呼してしまいました。続けて驚いたことに、ブッポウソウは１羽ではなく、２羽いました。さらに、空中に舞う昆虫を捕食している様子も見せてくれ、最後はハシブトガラスに追われて姿を消しました。

ブッポウソウ　2018.5.27　苫小牧市勇払

ブッポウソウは雌雄同色ですので、２羽が繁殖行動のため行動を共にしていたのかは不明ですが、ブッポウソウ２羽が行動を共にしていた記録は、2017年６月26日に釧路管内厚岸町でも観察記録があり（野鳥だより190号）、今後も注目する必要があると思います。苫小牧という地でブッポウソウを確認できたことは、苫小牧市を中心に野生動物を観察する者として嬉しいものでありました。

後に知ったことですが、違和感を感じていたカエルのような鳴き声の正体は「ブッポウソウ」でした。知識があればもっと意識して探索できたはずです。私はこれ以降、野鳥に関する知識の習得に励むことになりました。

探鳥会ほうこく

藤の沢

2018. 5. 5

札幌市南区　松岡　素道

今回、はじめて参加させて頂きました。私にとっては、大変貴重な体験となりました。また、興味深いお話を聞かせて頂き有難うございました。冒頭、オカパルシ川にて、近年、魚がいなくなりその為ヤマセミの姿を観ることが難しくなった旨のお話が有りました。原因としては、地元の方の話として、オカパルシ川の上流にできた「雪捨て場」の影響が考えられるとのこと。大変悲しく残念に思いました。私が、藤野に本格的に住むようになってから、十数年経ちます。「雪捨て場」の存在は知っていましたが、ただ「前からこんな所に雪捨て場なんてあったかな。最近できたのかな」くらいの認識でした。お話をお聞きし、改めて身近な出来事にもっと関心を持たなくてはいけないなと感じました。また、特に自然環境に関しては、自分の世代に在るものは、少なくとも壊すことなく、そのまま次の世代へ引き継ぐことが大切なのではないかとも思いました。そういう観点からすれば、真駒内にボールパークが誘致されなくなったことは、私個人としては、良かったのではないかと思っています。以前、公園内を流れる真駒内川で、ヤマセミやカワセミを観たことがあるからです。

当日は、あいにくの曇り空となり林の中が暗かったことと、自分の視力の衰えもあり、自身の目(持参した双眼鏡)で確認できた野鳥の種類は、そう多くはありませんでした。それでも、センダイムシクイ、ヤマガラ、マヒワ、イスカなど観ることができました。イスカは、初めて観た野鳥でした。雄の赤い色は鮮やかで、ネットで見るより実物の方がはるかに美しかったです。また、山の中腹の斜面で一本の木の幹に大きな穴が３～４個開いているのを発見しました。お聞きしたところ、クマゲラの開けた穴とのこと。さすが、クマゲラだなあ、と感心させられました。その姿をぜひ見たかったです。私は、アイヌ語地名に多少興味があります。鳥にちなんだアイヌ語地名もあるようです。そんなことから、この鳥のアイヌ語名はなんだろうということで、ネットで調べたりしています。因みに、クマゲラのアイヌ語は「チプタチカプ（cip（舟）ta（ほる）cikap（鳥）」とのこと。今回の穴を観て、アイヌの人々は、まさに的を射た名前を付けたものだと思いました。初めて見たイスカも検索しましたが、残念ながら分かりませんでした。

自宅近くの林で、野鳥を観るようになってから約3年が経ちます。その間残念なことに野鳥に対する知識はほとんど深まっておりませんが、体調(視力)に留意しながら、これからも楽しく、長く、野鳥(特に身近にいる野鳥)の観察を続けて行きたいと思います。また、来年もぜひ「藤の沢」探鳥会には、参加させていただきたいと思っております。

【追伸】後日（５月７日）、今回の探鳥会の復習を兼ねてオカパルシ川沿いを歩きました。運よくオオルリに出会いました。瑠璃色が陽射しを浴びて輝き、よりいっそう艶やかでした。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、オオタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒ

ヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、ニュウナイスズメ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、マヒワ、イスカ、シメ、アオジ　以上31種

【参加者】秋本秀人、秋山洋子、市川和彦・恵子、今村三枝子、岩井　茂、小堀煌治、品川睦生、白澤昌彦、髙橋宣子、田中慶洋・ひろ子、辻　雅司・方子、中村ケイ子、野島美代子、畑　正輔、早坂泰夫、樋口孝城、松岡素道、本杉政司・朋子、森本玲子、守屋信男・幸代　以上25名

【担当幹事】小堀煌治、品川睦生

野幌森林公園

2018. 5. 6

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、コガモ、キジバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、キビタキ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ

以上26種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、今善三郎、岩井　茂、大表順子、川村宣子、後藤義民、媚山陽子、鈴木勝之、島崎康広、高橋きよ子、高橋貞夫、高橋利道、立田節子、辻　雅司・方子、道場　優、富川　徹、中村　隆、蓮井肇、畑　正輔、早坂泰夫、藤岡千鶴江、前田八郎、丸島道子、松原寛直・敏子、三井　茂、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子　以上31名

【担当幹事】畑　正輔、早坂泰夫

千歳川

2018. 5. 13

苫小牧市　大垣　創

この度、初めて探鳥会に参加させて頂きました。苫小牧市に転居してから野鳥が好きになり、まだまだ1年半となるところです。名前を聞いたことはあるが実物を見たことがない、名前を聞いてもピンと来ないと様々ありますが、普段は自宅から近いウトナイ湖や苫小牧北大研究林で、バードウォッチングを楽しみながら、野鳥の名前や特徴を覚えています。

さておき、初めての探鳥会ということで、千歳川、やや市街地から離れた場所での参加です。普段、自動車やバイクでは市街地から支笏湖へ抜ける道路を走りますが、参加した場所にて数多くの野鳥が観られるということは知らなかったです。いざ参加しますと、千歳川を支笏湖方面の上流へ向かって歩きました。

前半では、鳴き声を聞いてもすぐに何の野鳥かは判明できなかったり（発見者の方が名前を言ってもピンと来なかったり）、途中ではキビタキが何羽かいるそうで持参の双眼鏡で覗いてみましたが、当日はあいにくの雨天であり、裸眼でもレンズ越しでも思うようには観えませんでした。

やがて後半に差しかかると、イワツバメの集団、ミサゴ、オオルリ（いずれも初見）などが観られて、徐々に期待感が増していました。なかでも、オオルリに至っては初めて観るもので、光沢のある青色につぶらな瞳（ˆωˆ）…。探鳥会のスコープや持参した双眼鏡でしばらく眺めていたのを覚えています。そのくらい青く輝いていたオオルリは、雨天だった天候が晴れていたかのような気分になりました。最後の王子第4発電所のあたりでは、野鳥よりもダム湖の見晴らしと満開の桜に視線が泳いでしまったが、野鳥を含めてとても素晴らしかったことを印象に、当日は帰りました。

今度、苫小牧から千歳へ自動車やバイクで行く際は、千歳川や支笏湖周辺で、カワセミやヤマセミ、その他の野鳥を観られることを期待して、バードウォッチングをしたいと思います（もちろん、気配を感じたからと言って立ち入り禁止の場所に入ったりはしませんし、また、バイクでふかすことは絶対しません…）。

また、機会が御座いましたら、北海道野鳥愛護会主催の探鳥会に参加したいと思っています。楽しみの面でも学びの面でも、とても満足です。ありがとうございました。

【記録された鳥】オシドリ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、ツツドリ、ミサゴ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、アオジ　以上36種

【参加者】岩井　茂、岩井幸子、大垣　創、川村宣子、栗林宏三、佐藤香織、品川睦生、島崎康広、辻　雅司、畑　正輔、早坂泰夫、美頭佳範、松原寛直・敏子、吉田慶子

以上15名

【担当幹事】栗林宏三、島崎康広

鵡川河口

2018. 5. 20

【記録された鳥】オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、クロガモ、カワアイサ、ウミアイサ、キジバト、ウミウ、アオサギ、カッコウ、ハリオアマツバメ、チュウシャクシギ、ユリカモメ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ツバメ、ウグイス、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ、オオジュリン、カワラバト（ドバト）　以上34種

【参加者】臼田　正、大表順子、門村徳男、金子喜映・洋子、北山政人、熊本進誠、栗林宏三、近藤章子、品川睦生、島崎康広、辻　雅司・方子、中田勝義、畑　正輔、早坂泰夫、原　美保、樋口孝城、丸島道子、山本　学

以上20名

【担当幹事】臼田　正、門村徳男

野幌森林公園（早朝）

2018. 5. 27

石狩市　木村　斉

５月27日６時からの野幌森林公園早朝観察会に参加しました。集合場所では早々にオオムシクイ（初見）の声が聞こえ、歩き始めるとアオバトやキビタキ、オオルリなどの聞き覚えのある夏鳥の鳴き声が聞こえてきます。特にお調子者のキビタキはコースのあちこちで鳴いていて、一行の前に何度も現れ「見てくれ！」とばかりカメラの前でポーズを取っていて人気者でした。鳥たちの声が聞こえるたびに参加者のほとんどは素早く反応、双眼鏡やカメラを向けて姿が確認できているようですが、その眼の良さにはいつも感心しています。

探鳥コースの中程ではフクロウの巣立ちビナに会うことができました。イメージしていたより大きい個体でしたが、親鳥が近くで見守る中、細い枝に留まってバランスを崩してはバタバタと体制を整えているヒナの仕草は、図鑑などで観る以上にとっても可愛いものです。１月に真駒内公園で眠っているようなフクロウを観て以来「いつかはヒナに会いたい」と思っていましたが、野幌でこんなに早く出会うことができ感動しました。後半のコースではオオアカゲラのヒナにも会うことができ、今の時期・子育て季節ならではのヒナを中心とした鳥の家族を観察できたことは大きな収穫でした。

また、愛護会の探鳥会では鳥類だけでなく野の草花についてもいろいろ教えてもらうことができ勉強になりました。知らなくて、気が付かなくて、何度も前を通り過ぎていた自分が居ました。今回、コケイランに始まりコンロンソウ、ミヤケラン、ユウシュンラン、ノビネチドリ、ヤマシャクヤク、ヒダカエンレイソウなど、個人的に何度か歩いている野幌のコースですが初めて出会うことができました。およそ200万都市の近郊にこんなにも豊かな生態系が存在していることを改めて気付かせてもらったこと、野幌森林公園での早朝探鳥会に感謝します。

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、オオムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、アカハラ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ　以上27種

【参加者】秋山洋子、岩宮千鶴子、大内康典、大表順子、木村　斉、小谷内久江、近藤章子、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋利道、竹田芳範、辻　雅司、長野隆行、中村隆、成田京子、畑　正輔、早坂泰夫、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山室ゆかり、横山加奈子　以上24名

【担当幹事】島田芳郎、早坂泰夫

植苗ウトナイ

2018. 6. 3

後志管内共和町　岩井　茂

会員以前の時期を含め、今回の植苗は初めての会場です。朝５時半の小沢発の始発列車を乗り継いで、午前９時前に植苗駅に到着。長時間の移動の疲れを忘れる程、植苗は清々しい快晴でした。

ガイドの鷲田さんの後に従って、まず森林の野鳥を探します。６月に入って、野鳥の声よりエゾハルゼミの声が聞こえてきます。何より新緑の時期を過ぎ、鬱蒼とした森林が眼前に広がっていきます。かすかに聞こえる野鳥の声を特定する事や、木陰から野鳥の姿を見かけるのは、初心者の筆者にとっては至難の業です。

やがてウトナイ湖へ進みます。森林から草原へと場所が変わりますが、トンボの群れが飛んでいた事とズミの花が咲いていたのが印象的でした。初めて植苗側からウトナイ湖を見ましたが、手つかずの自然がそのまま残されており、美々川の静けさに感銘を受けて、機会があれば再訪したい場所になりました。国道側のウトナイ湖しか知らない私にとって、新鮮な光景でした。

何より探鳥会終了後、話に耳を傾けながらの食事が楽しく、しばし足の疲れを忘れる程でした。

帰りは会員の辻さんの車で、JR千歳駅まで送って頂きました。この場を借りて、感謝を申し上げます。

心配性の母が車で出かけるのを嫌がるので、どうしても車で移動せざるを得ない場合を除き、公共交通で探鳥会に足を運んでいます。

探鳥会の楽しみは、座学で得た野鳥の知識の数倍もの勉強になるだけでなく、周辺の植物を知ることも大切だと考えています。

植物が分かるだけで、自然の理解を深めていきます。ひっそりと咲く花の名前を覚えることで、自分自身の知識を広げるきっかけになります。

こうして探鳥会に出かけることで、改めて自然が大好きだと認識しています。

これからも季節を問わず、できる限り足を運んでいきます。

【記録された鳥】コブハクチョウ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、オオジシギ、トビ、オジロワシ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、コヨシキリ、クロツグミ、ノゴマ、ノビタキ、キビタキ、オオルリ、スズメ、カワラヒワ、イカル、ホオアカ、アオジ、オオジュリン　以上32種

【参加者】五十嵐静江、今村三枝子、岩井　茂、臼田正、大垣　創、小野寺まゆみ、北山政人、近藤章子、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、鈴木恵子、田守真一・敦子、辻　雅司、長野隆行、畑　正輔、早坂泰夫、原　美保、樋口孝城、本杉政司・朋子、森本玲子、山根久佳・雅、横山加奈子、吉田慶子、鷲田善幸　以上29名

【担当幹事】北山政人　鷲田善幸

厚別川

2018. 6. 10

江別市　伊東久美子

初めて参加させて頂きました江別の伊東久美子です。今日は大変お世話になりました。初めての探鳥会でしたが、

とても楽しい時間を過ごす事が出来ました。今年になって野幌森林公園にウォーキングがてら鳥を見に行ってました。いつもは双眼鏡でのみ鳥を見ておりましたが、今日初めてフィールドスコープで鳥を見た時、鳥のあまりの可愛さ、彩りの美しさに驚いた次第です。特にモズ!!今日一番のお気に入りになりました。あまり巡り会えないらしいアリスイに３回も会う事も出来ました。アリスイの羽繕いしている姿をフィールドスコープでしっかり見られ、背中の不思議な模様も観察することが出来ました。次回野幌森林公園の探鳥会にも参加出来たら嬉しいです。今日は、本当にありがとうございました。

【記録された鳥】カルガモ、カイツブリ、キジバト、カッコウ、トビ、アリスイ、アカゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラバト（ドバト）　以上23種

【参加者】秋山洋子、天崎比良子、五十嵐静江、伊東裕二・久美子、今村三枝子、岩井　茂、大表順子、栗林宏三、近藤章子、品川睦生、高橋利道、辻　雅司、鳥屋祐樹、橋爪陽子、畑　正輔、早坂泰夫、樋口孝城、前田八郎、本杉政司・朋子、松原寛直・敏子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子　以上26名

【担当幹事】品川睦生、横山加奈子

野　幌　森　林　公　園

2018. 6. 17

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、アオジ　以上23種

【参加者】秋山洋子、安保信雄、五十嵐静江、石井正訓、伊東裕二・久美子、今村三枝子、大表順子、川村宣子、近藤章子、山藤京子、品川睦生、篠原昭治、高橋利道、田代明子、田中洋行、千葉俊子、千葉敏紀、千葉みゆき、辻　雅司、出光昭吉、道場　優、富川　徹、中村　隆、二川原　登、畑　正輔、早坂慶子、早坂泰夫、平田修二、辺見敦子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、守屋信男・幸代、横山加奈子、吉田慶子　以上38名

【担当幹事】道場　優、中村　隆

【宮島沼】

2018年９月30日(日)

集　合：湖畔10：00

交　通：中央バス

岩見沢ターミナル発（月形行）

または月形駅発（岩見沢行）

「大富農協前」下車　徒歩10分

【野幌森林公園】

2018年10月７日(日)、11月４日(日)、12月２日(日)

集　合：野幌森林公園大沢口　９：00

交　通：夕鉄バス　新札幌駅発（文京台南町行）

「大沢公園入口」下車　徒歩５分

JRバス　新札幌駅発（文京台循環線）

「文京台南町」下車　徒歩５分

【ウトナイ湖】2018年11月11日(日)

集　合：野生鳥獣保護センター前　９：30

交　通：道南バス　新千歳空港発（苫小牧行）

「ウトナイ湖」下車　徒歩５分

☆　いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆　昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

☆　探鳥会の問い合わせ先

北海道自然保護協会　☎011-251-5465

10：00～16：00（土日、祝日を除く。）

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します（1部1,200円）。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先　畑　正輔　TEL　011－894－0017

携帯TEL　090－3117－4261

E-mail hata2002@lapis.plala.or.jp

【新しく会員になられた方々】

近藤　章子	（恵庭市）
伊東　久美子・裕二	（江別市）
安保　信雄	（札幌市清田区）
木村　斉	（石狩市）
関　純彦・久恵	（札幌市中央区）
山地　みのり	（登別市）
坂井　柊紀	（北広島市）

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人 2,000 円、家族 3,000 円（会計年度４月より）　郵便振替　02710－5－18287

〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465

HPのアドレス　http://www.aigokai.org